

Title	『ベンヤミンの生涯』への補遺 二篇
Author(s)	野村, 修
Citation	ドイツ文学研究 (1989), 34: 30-49
Issue Date	1989-03-30
URL	http://hdl.handle.net/2433/185024
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

『ベンヤミンの生涯』への補遺 二篇

野村修

I 「境を越える」への補遺

ヴァルター・ベンヤミンがナチ占領下のフランスから逃れようとして、数人の道づれとともにピレネー山脈の南端に近い道ならぬ道を徒歩で越えた日、そしてスペイン側の国境の町ポル・ボウの旅宿で、夜半に致死量のモルヒネを嚙むことに終わる日、一九四〇年九月二十六日について、ぼくは一九七四年に「境を越える」という一文を書き、この『ドイツ文学研究』報告二一号（七五年一月刊）に発表させてもらった。この一文は二年後、拙著『ベンヤミンの生涯』（平凡社、七七年）に再録されたが、その間に刊行されたゲルシヨム・ショーレムの『ヴァルター・ベンヤミン——ひとつの友情の歴史』（一九七五、邦訳題名『わが友ベンヤミン』）のなかに、ベンヤミンのピレネー越えに同行したグルラント夫人というひとが、さきにかリフォルニアに亡命していた夫にあてて書いた手紙（一九四〇年一〇月一日付）のなかの、ベンヤミンの死の模様を報じた部分が、はじめて公表されていたので、ぼくはその全文を訳出して、再録のぼくの一文に付載することができた。

そこには、ベンヤミンがグルラント夫人とその息子のホセ少年との三人連れで、山越えにとりかかったと記さ

れていて、道案内をしたのが、誰だったかは、まったく言及されていない。しかし一九八二年になって、三人の道案内をした当人、リーザ・フィットコ（一九〇九—）という女性の、一九四〇年九月二六日の当日とその前日とにかかわる、詳しい証言が、新しくぼくらに知られることになる。かの女は、ベルリンで育ち、早くから反ファシズム運動に加わっていて、四〇年当時は自身亡命者だった。自分のためにも知人たちのためにも南フランスからの脱出路を切りひらく必要に迫られて、かの女は、ピレネー越えのひとつのルートを開拓し、四〇年九月からしばらくのあいだ、かなりの数の亡命者たちを、その道を通じて脱出に成功させることになったのだった。

ナチ・ドイツからフランスに遁れていた多数のひとたちが、四〇年五月のドイツ軍のフランス侵攻後、さらにそこから海外へ亡命するためにさまざまな辛酸を舐めたこと、非占領地帯の南フランス、とくにマルセーユが、四〇年夏にはかれらの吹きだまりの鰯を呈したこと、そしてフランスからの出国ヴィザなどの入手の困難さや、マルセーユ発の船の少なさが、ピレネー山脈を非合法に越えてスペインへ出、スペイン経由でさらに西へ赴く方途をかれらに考えつかせたこと等々については、ぼくはすでに「境を越える」に書いているから、ここではくりかえさない。ともあれ、この非合法ルートをくぐり抜けてスペインを通過し、リスボンからアメリカあるいはイギリスへ渡航することのできたひとびとは、かなりの数にのぼる。そしてそのかげには、ピレネー越えの間道を自発的に探り、発見し、案内人となって幾度もその道を往復した数人のドイツ人とアメリカ人の、互いに独立しての、ときには連携しての、貴重な活動があった。リーザ・フィットコは、そのような無名の活動家たちのひとりであり、そしてかの女がかの女の見いだした経路を最初に案内していった相手が、ほかでもなくベンヤミンらの一団だったのだ。

リーザ・フィットコは翌年までその活動に従事したのち、四一年末に自身キューバに脱出した。四八年になってUSAに移ることができ、いまに至るまでそこに住んでいる。現在でもシカゴで、平和運動に携わっているとのことである。

ベンヤミンにかんするかの女の証言が知られるようになったいきさつは、つぎのようだった。一九八〇年の春、ゲルシヨム・ショーレムの知人でロンドンに在住するヘブライ学者シモン・アブラムスキーというひとと、かの女は偶然の機会に知り合うこととなり、そのときに、わたしはかつてベンヤミンたちの道案内をしたことがあった、と漏らした。そして、やがてアブラムスキーを介して電話をかけてきたショーレムにたいして、詳しい話を電話で伝えただけでなく、かれの乞いに応じて当時の回想を文章にとどめることになった。この文章は八〇年のうちに書きあげられ、まず一九八二年一月号の『メルクーア』誌にドイツ語訳で、ショーレムのはしがきを付されて公表されたのち、ついで同年刊の『ベンヤミン全集第五巻』の編者（ロルフ・ティードマン）注のなかに、英語の原文のまま収録された。

この新資料はじつに興味深いものなので、ぼくは早速それをたねに、「人境を越える補遺」という文をしたため、『京都大学新聞』編集部の好意で、同紙八三年七月一日号に載せてもらった。

ところがその後、一九八五年になって、リーザ・フィットコは『ピレネーを越える私の道』という回想録を刊行している。この本の第七章は「ベンヤミン老」と題されていて、ベンヤミンたちとのかの女の最初のピレネー越えを語っている。その章の文章は、じつをいえば、さきのかの女のショーレムあての手紙をもとにしていて、内容にはほとんど変更がない——けれども、ぼくとしてもこれを読んだ機会に、さきに『京都大学新聞』に発表し

た文に、わずかばかり手を加えて残しておきたい、という気もちに駆られる。というわけで、同紙にたいしては非礼を詫びなければならないが、ここにもう一度、同じことを書かせていただこうと思う。

さきに触れたようにリーザ・フィットコは、フランスに亡命した多くのユダヤ系ドイツ人と同じように収容所ぐらしの苦難を味わったのちに、マルセーユにまで脱出してきていて、四〇年夏、自分のためにも知人たちのためにも、ピレネー越えの方途をも模索していた。かの女は、同年九月の半ばすぎ、フランスとスペインとの国境地帯へ赴いて、間道へのなんらかの手がかりを得ようとする。そして国境近くの港町ポール・ヴァンドルで、かの女は港湾労働組合の一メンバーから、隣村バニユルス・シュル・メールの村長を紹介してもらう。アゼマという名のこの村長は、社会党員で、スペイン内戦のときに共和派を助けて医師や看護婦や医薬品を間道をつうじて送り届けていた、というのだった。ナチ・ドイツに降伏後のフランスでのこのような村長の存在は、まさしく例外中の例外だったろう。じじつかれば、その後まもなく解任されたといわれている。

しんせつそのもの、といわれるこの村長のことを、ぼくはすでにカール・レットラウというひとの回想録から知っている。共産主義者レットラウもまた、かれからピレネー越えの道を教わった。そのことをぼくは「境を越える」という例の一文のなかに書きとめておいたけれど、しかしそのときには、レットラウの辿ったルートとベンヤミンのそれが同一なのかどうか、ぼくは確信がもてずにいた。だが同一だったことが、いまは断定できる。

リーザ・フィットコはこの村長から、こう教えられる。不運なことに、国境のスペイン側の港町セルベルから、歩きやすい道路は現在閉鎖されていて、警察（とナチのゲシュタポと）の厳重な監視下におかれている。残

る道は「リステル・ルート」しかない。スペイン内戦時の共和派の一將軍の名をとったこのルートは、しかしじつは古くからのもので、もともとは密輸業者の利用する間道だった。海岸から遠く離れたところでピレネーを越えてゆくため、いささか険しく、骨が折れる——けれども、この道をとるならばまず安全だろう。

村長からこう教わってポール・ヴァンドルに戻っていたかの女のところへ、前ぶれもなくベンヤミンが訪ねてくる。九月二五日のことである。かの女の夫とベンヤミンとが前年に、同一の収容所に抛りこまれてくらしたとがあったため、かの女はすでにかれと面識があり、かれをひそかに「ベンヤミン老」と綽名していた（かれはまだ四八歳だったのに）。かの女にむかってベンヤミンは、あなたの所在をあなたの夫から聞いた、そしてあなたの夫は、ぼく（ベンヤミン）の国境越えをあなたが手助けするだろうといていた、という。

かの女は、道が険しいらしいことを伝えるが、「かまいません」、とかれは答える。「安全でさえあればいいのです。ぼくには心臓の故障があるので、ゆっくり歩かなければならないでしょうけれども。それから、ぼくには連れが二人います。国境を越える目的で、マルセーユから一緒に来たひとたちで、グルラント夫人というひとと、その息子とです。この二人も同行してよいでしょうか？」

それはもちろんだ、とかの女はいう。ただ、ご承知ねがわねばならないが、私は経験をつんだ案内人ではない。村長から道を聞き知ったばかりで、まだ一度もそこを歩いたことはないのだ。それでもあなたは行こうと思うのか？

「行きます」とベンヤミンはためらわずにいう、「行かないことのほうが、ほんとの危険ですからね」。

かの女は思いだす、これがかれのフランス脱出の最初の試みではないことを。一九四〇年夏のマルセーユの、黙示録的なおうか、絶望的な霧囲いのなかでは、夢のような冒険譚が簇生していた、悲劇のなかの笑劇——地図上にはない国の旅券やヴィザが出現したりする——をいろいろと伴って。そしてひとびとはそのような笑劇的側面を、まだ笑うことができた。というより、笑うことによって生き伸びていた。抑えようのないそんな笑いをひとびとから誘いだしたエピソードのひとつは、こういうものだった。ベンヤミンとその友人の医学者フリッツ・フレンケルが、いかにも学者的な風貌のこの二人が、フランスの水夫に変装して貨物船での密航を企て、当然にも見破られた、というのである。このことは事実だったろうか、それとも誰かの案出した笑いなしだったろうか？ もし事実だったとするなら、二人が幸いに逮捕されずにすんだのは、当時のマルセーユ港にはかなりの混乱が支配していたからにちがいない。

リーザ・フィットコは、もう一度バニユルスの村長アゼマにベンヤミンとともに会って、道を確かめた上で行くことに決める。二人と、ベンヤミンの連れのもう二人、計四人は、こうしてバニユルスに向かう。どういう方法で行ったのかは、リーザの記憶にはもうない。当時、国境付近の鉄道は常時警察の検問下にあったから、多分歩いて行ったのだらう、とかの女は回想している。六ないし八キロメートルの行程だという。

村長の部屋の窓からは国境の山脈が間近に見えた。村長は越えるべき方向を指差してみせ、途中の小さな草原まで、その日の午後のように散歩してみても道を確かめておくことを勧める。なぜなら明朝は、暗いうちに出発せねばならぬだろうから。朝の五時ごろ、葡萄山へ仕事に出かける村人たちに紛れて山へ向かうのが、いちばん安

全なのだ。草原までは一時間くらいだろう。そこまで行って戻ってきなさい、そしてもう一度私と、あなたがたの辿ったのが正しい道だったかどうか、確かめ合うことにしましょう。そうアゼマ村長はいった。

四人は「散歩」に行く。しかし妙なことにベンヤミンは、携えてきていた重い書類鞆を、村の宿屋に預けておこうとしない。なぜ置いてゆかないのか？ かれはいう、「これにはぼくの新しい原稿がはいっています。だいいじなものなんですよ。なくすわけにはゆきません。いのちよりだいいじなんです」。

三時間ちかくをついやして、村長のいつていた草原に到着する。ベンヤミンは草のなかに横になり、眼をとじる。疲れたのにちがいない。下山しよう、とほかの三人がうながしても、かれは立ちあがらない。「だいいじょうぶ？」「だいいじょうぶですよ。どうぞ出かけてください。」「あなたは？」「ここに残ります。ここで夜明けかして、明朝あなたがたとここで合流します。」

九月下旬の山は寒い。かれには寝具もなければ食料もない。気違いじみている。だがいくら説得しても、かれは決心を変えない。とにかく行程の三分の一はあとにしたわけだし、村へ戻ってまた一度同じ行程を辿るだけのちからは、ぼくの心臓にはなさそうだ。そうかれはいうのだった。

どうしても動かないかれを残して、やむなく三人は村へ立ち戻る。食料も調達しなければならぬのだ。道みち、リーザは思いおこす、身を苦しめること、危険に身をさらすことが、常人とは異なるかれの、危機への対処法であることを。かれはある困難な時期に、好きなタバコを絶ったことがあった。それではかえってつらからう、こころやからだをできるだけらしくにしないで、困難に対処できまいに、とひとからいわれて、かれは答えた。

苦しきのなかにあってこそ、危機を克服するに足りる精神力の集中が可能になるのだ、と。今度もかれは、山中

の野宿の苦しきをつうじて、かえって精神力を保たせようと考えたのだろうか。

右記はリーザが推量したことだが、私的なことをさしはさめば、秋にはなくて春にだが、ある山中での野宿を、ほくも数十年前に経験したことがある。やはり寝具も食料もなく、そして大きな鞆を——書類鞆ではないもの旅行用の鞆を——かかえて。久住山中で、道に迷つてのことだった。寒くてほとんど眠れなかった。ベンヤミンはどうだったのだろうか？

翌朝七時、村を五時に発つてきた三人が草原に着くと、ベンヤミンは身を起こし、「友情のこもる」微笑をうかべた。かれの眼の下には、暗赤色のくまが出ている。心臓病の発作でも出たのだろうか？ リーザたちのそういう心配を見てとって、かれはめがねをはずし、ハンカチで顔を拭く。「これは、露のせいで、めがねのふちの色がおりただけですよ。」

道はこのあたりから峻しくなる。道というより踏み跡で、杜絶えてはまた続く。かれはゆっくり同じ歩度で歩く。時計を見ながら、一〇分歩いては一分休むことをくりかえす。この歩きかたをかれは、夜のうちに考えておいたのだった——こうすることが、かれの心臓をいたわりつつ歩きとおす唯一のてだてだろう、と。

グルラント夫人の息子の一五歳ほどの少年ホセと、リーザ・フィットコとの二人が、代わるがわる、かれの鞆の運搬を手伝う。じつに重かった、とかの女は記している。国境の山の背にとりつくところは、急傾斜だったので、この二人がかれの鞆だけでなくかれ自身をも両側からかかえあげるようにして、やっと登ってゆくことができた。かれの呼吸は苦しそだったが、機嫌はよかった。総じて四人とも上機嫌だったし、よく気も合っていた。

山の背に到着して小休止、昼食。みな少食だ。数カ月にわたる窮乏の生活が、亡命者たちの胃を小さくしていた。

尾根道を行き、やがて最高点。絶景。地中海が、かれらの来た方角とこれから行く方角との両方に、青の色を微妙に連えて、ひろがっている。山と谷は秋の色。

ここはもうスペイン領である。案内者のリーザは、スペインのヴィザをまだ持っていなかったから、ほんらいならこのへんで引き返さなくてはならないのだけれども、残る三人を三人きりで行かせるのがこころもとなく、なおしばらく同行することにする。

思いがけなく、別の道を辿ってきた数人の（リーザによれば三人、グルラント夫人の記憶によれば四人の）、女性ばかりの亡命者グループに、かれらはでっくわし、合流する。さほどの驚きはない。道なき道をそれぞれに探す亡命者たちが多いことは、かれらには周知のことだったから。（リーザ・フィトコは、この合流のくだりを、八五年刊の著書では、なぜかはぶいてしまっている。）

路傍の小さな池というか、水たまりがあつて、濁った緑色の水をたたえている。異臭が鼻をつくような水だが、ベンヤミンは身をかがめて、それを飲むとうとする。

「飲んでほだめ、きつと毒よ」とリーザがかれを思いとどまらせようとする。かの女は水筒を持ってきてはいたものの、それはもうからだだった。しかもベンヤミンはその水筒がからになるまで、自分も喉がかわいているという素振りは、ほんの少しも見せずにいたのだった。

「申しわけありませんが、ここで飲んでおかないと、ぼくはおそらく目的地までもちこたえられませんか。」
目的地がもう近いこと、汚水を飲むのが危険なことをいくらリーザがかれに説いても、むだだった。かれにいわせると、かりに水が有毒であつて、かれが病気になるとしても、もうここまで来ている以上、かれのだいじな鞆がゲシュタポの手におちることはもはやない。だからかれは飲むことをいとわぬ。というわけであり、けつきよくかれは、濁った水をすくつて、口に入れてしまう。

道はすでにゆるやかな降りである。午後二時ごろ、かれらは眼下に目的のスペイン領の港町ポル・ボウが、見おろせる地点に着く。もうだいじょうぶ。リーザ・フィットコはここでひとびとをしばらく見送り、自分はフランス側へ引き返す。

その後のベンヤミン一行の運命はかの女の証言の範圍の外になるけれども、そのおおよそはすでにぼくらに知られている。「境を越えて」に記述しておいたように、かれらの一行は、スペインの通過ヴィザを所持していたにもかかわらず、到着した日がたまたま、スペイン官憲の対応が越境者にとりわけ苛酷だった数日にあつたという不運に見舞われて、フランスへ翌日強制送還される、と言ひ渡される。そしてベンヤミンはその夜、致死量を大きくこえるモルヒネを——かれはそれをあらかじめ所持していた——嚙むのだ。かれの自殺に感銘を受けて、だるうか、官憲は残る一行にスペイン通過を許可する。さらに数日後には官憲の態度がふたたび緩和されて、スペインの通過ヴィザの所持者のスペイン通過には支障がなくなり、リーザ・フィットコの間道案内者としての活動も再開されてゆくことになる。

ベンヤミンの持っていた「重い」黒い書類鞆は、しかしどこに行っただろう？ それにはいつていたといわれる「いのちよりもだいじ」な「新しい」原稿とは、いったいなんの原稿だったのだろうか？ リーザの証言をシヨールムからの連絡で知ったベンヤミン研究者ロルフ・ティーデマンは、至急ボル・ボウに、またその地域の首邑であるフィゲラスに赴いて、関係の役所という役所を廻り、調査する。ベンヤミンの「商社員がもつような革の書類鞆」が官憲に領置されたことは、たしかに役所の記録に残されていた——が、その鞆がけつきよくどうなったのかは、どうしてもわからなかった。

鞆がじつに重かったといわれることから、シヨールムは、その中味は大部の原稿に違いなく、したがって、いまはベンヤミンがパリに残した膨大なメモしか知られていない「パリの遊歩街」論の、まとまった新稿だったかもしれないぬ、と憶測している。しかし、他方ティーデマンは、ほかのさまざまな証跡から推定して、鞆が重かったにせよ、はいつていたのはあの簡潔な絶筆「歴史の概念について」（別名「歴史哲学テーゼ」）としか考えられない、と主張している。

いずれにせよ——ぼくが眼前に見る思いがするのは、その鞆をかかえて、一〇分歩いては一分休むかれ、山中の草地に野宿するかれ、そして眼の下に暗赤色のくまのできた顔で微笑しているかれのすがたである。

Ⅱ ベンヤミンの「複製技術の時代における芸術作品」論とブレヒト

ベンヤミンとブレヒトとの友情の深さについては、いまさら語るまでもあるまい、とぼくには思えるのだが、

しかし、ブレヒトはベンヤミンの「複製技術の時代における芸術作品」論を少しも評価せず、蔑視していた、とする見解をもつひとがいまだにいますので、そういう見解には根拠がないことを、ここで明らかにしておきたい。

そういう見解を述べているひとは、ベンヤミン全集の編集責任者のひとりでもあるロルフ・ティーデマンであって、かれは『ベンヤミン全集第一巻』の編者注のなかに、こう書き記している。

ブレヒト自身が「複製技術論」についてどう考えていたかを教えるものは、ブレヒトの『作業日誌』のなかの記述である。もしこれをベンヤミンが知っていたら、ベンヤミンの幻想はすっかりふっとんでしまっていたらうに。

ティーデマンがここで「ベンヤミンの幻想」と呼んでいるのは、ベンヤミンが、ブレヒトも編集者のひとりとして名を連ねていてモスクワから刊行されていた雑誌『ダス・ヴォルト』に、「複製技術の時代における芸術作品」論がドイツ語の原文のまま掲載されることを、望んでいたことをさしている。

ティーデマンはそして、右の記述に続けてブレヒトの『作業日誌』の一九三八年七月二五日の項の、一部分を引用している。

しかしほくはここに、ティーデマンの引用した一部分のみに限ることなく、当日のブレヒトの日記から、ベンヤミンにかかわる部分の総体を、まず訳出しておく。

ベンヤミンがここに来ている。かれはボードレールにかんするエッセイを書いている。そこには良いものがある。かれは、歴史のない時期がいまや到来するという観念が、一八四八年以後の文学をどのように歪めているかを、指摘している。すでにそのころから、「後年の」パリ・コミューンにたいするヴェルサイユ・ブルジョワジーの勝利が、予想され、計算に織りこまれていたわけなのだ。ひとは悪を身につけ、その悪に花のかたちをあたえた。これを読むことは役に立つ。注目すべきことに、これを書くことをベンヤミンに可能にしているのは、憂愁^{メランコリー}である。かれは、かれがアウラと呼ぶものから出発する。アウラは夢（白昼夢）と関連している。かれにいわせると、自分が見られていると感ずるひとは、背後から見られている場合でも、その視線に応答（ノ）する。見る相手から見返されることへの期待が、アウラを生む。アウラは最近では、礼拝的なものの解体とともに、解体しつつあるという。そのことをベンヤミンが発見したのは、映画の分析にさいしてだった。映画ではアウラは、芸術作品の複製が可能になったことによって、解体している。まったくの神秘論だ——神秘論に反対する態度をとっているにもかかわらず。このようなかたちに唯物論的歴史把握が翻案されるとは、あまりいただけそうにない。

ブレヒトの日記はひといきに書き流されているが、ちょうど中間あたりの、「注目すべきことに、これを書くことをベンヤミンに可能にしているのは、憂愁である」という一句を分岐点にして、前半では賞讃が、後半では批判が述べられていることが、誰の目にも明らかだろう。

ティーデマンはさきに言及したベンヤミン全集への編者注で、ブレヒトの日記の前半をまったく無視している

けれども、そのことはひとまず措くとしよう。だがそれでもなお、ティーデマンの判断は、たった数行のなかに、少なくとも二つの大きな誤解をふくんで成り立っている。

ひとつの誤解は、ブレヒトの日記が「複製技術論」について書かれている、とするものであり、もうひとつの誤解は、ブレヒトが批評をベンヤミンには直接に語らずに、いわばこそそと、日記のなかで陰口をいっている、とするものである。いずれも、あまりにも幼稚な誤解というほかはないのだが、公的に記述された文章のなかにあるものだから、やはりそれらは明確に指摘されなければなるまい。

1 ブレヒトの日記の日付は、一九三八年七月二五日である。つまりベンヤミンが、スヴェンホルのブレヒトのもとに滞在しながら、のちに「ボードレールにおける第二帝政期のパリ」と題されることになる長篇の評論を、熱意を傾けて執筆しているさなかに、この日記は書かれている。日記からばくが引用した部分の前半を見るだけでも、ブレヒトのことはベンヤミンの執筆し、つ、ある、評論に関連していることは、この評論を一読したことがあるひとには、疑う余地があるまい。

ついでにいえば、この点ではブレヒト『作業日誌』の編者も、似たような間違いをしている。こちらの編者注は、ブレヒトの発言を「ボードレールのいくつかのモチーフについて」に関連する、と書いている。しかし日記の時点では、このベンヤミン論文はまだ影もかたちもありはしない。周知のようにベンヤミンは、「ボードレールにおける第二帝政期のパリ」を、三八年秋に「勝利の感じを覚え」ながら書き上げることになるのだが、それがかれの意に反して、ホルクハイマーらの社会学研究所の紀要への掲載を拒否されたため、余儀なく一年後に、

ベンヤミンの書簡集を通読すればわかるようにほとんどいやいやながら、新稿「ボードレールのいくつかのモティーフについて」を仕上げざるをえなくなるわけなのだ。

ブレヒトの日記の後半は、たしかに一見して「複製技術の時代における芸術作品」（初稿一九三五、フランス語訳刊行一九三六、第二稿一九三六―三八）に関係してくる。複製技術の発達とともに芸術作品にまつわるアウラが消滅する傾向にあることの指摘は、同論文の主要な論点なのだから。しかしここでも、ブレヒトの日記のこゝとばとベンヤミンの論述とを照らし合わせてみると、おもしろい事実が浮かびあがってくる。

ブレヒトは、ベンヤミンの説明として、「自分が見られていると感ずるひとは、背後から見られている場合でも、その視線に応答（ノ）する。見る相手から見返されることへの期待が、アウラを生む」と記している。ところがそのようなかたちでのアウラの説明は、「複製技術の時代における芸術作品」論には現われない。こちらではアウラは、第一に、「いま」「ここ」にしかない、という一回性から発する権威的なものとして、そして第二に、「どんなに近くにあっても近づけないユニークな現象」として、説明されているにすぎない。では、ブレヒトがベンヤミンから受けた説明は、ベンヤミン自身の文章では、どこに出現しているだろうか？ それはたしかに出現している——が、一九三八年の時点までにはない。とりわけ肝要なことには、三八年にブレヒトのところで書かれた「ボードレールにおける第二帝政期のパリ」には、アウラへの言及はただの一度もない。ブレヒトが聞いたのと同じかたちでのアウラの説明が、ベンヤミンによって書き記されるのは、翌年に、社会学研究所の意向に近づけて改めて書かれた「ボードレールのいくつかのモティーフについて」においてである。

ここからはぼくの推測になるけれども、ブレヒトはベンヤミンから、書きかけのボードレール論を見せられる

か、あるいはそれについての構想を聞かされるか、したのにちがいない。そしてその仕事を大いに「役に立つ」と評価しつつ、それにアウラにかなする論及をふくめることには、論文に神秘論的なものを導入しかねないこととして、強く反対したのだろう。そしてベンヤミンのほうはブレヒトの反論を容れて、三八年のボードレール論からは、アウラへの論及を削ったのではなからうか。三九年論文でふたたびその論及が採り上げられるのは、社会学研究所の意向への歩み寄りの、ひとつのかたちだったかもしれない。

しかしその場合にも、ぼくの考えでは、三八年のブレヒトの異議は生かされている。ベンヤミンの三九年論文は、アウラについていろいろと語っているが、その論述は、「ショックによるアウラの解体」ということでボードレールの近代性を説明している結語のあたりによく見てとれるように、神秘論的なものとは遠いかたちになっているのだ。

2 プレヒトがベンヤミンとボードレール論にかんして直接に討論した、と日記に書いていないのと同じように、おもしろいことにベンヤミンもまた同じ日に、またその翌日に、日記を書いていながら、そこにはボードレール論についての記述はまったくなく、ブレヒトとの多方面にわたる会話が、そこには記録されているのだが。けれども、1の後半ですでに述べたように、ぼくには、ブレヒトがベンヤミンに自分の批評を直接に伝えることをしなかった、とは考えられない。つまり三八年のベンヤミンのボードレール論は、アウラに言及することがないからだ。それだけでなく、さきの「複製技術の時代における芸術作品」論において、アウラの解体後、アウラに代わってアウラと似たような役割を果たすことを大資本の側から期待されると述べられた芸術の「商品

的性格」の、急速な強化にかんしての言及を補足するもののように、三八年論文では、人間たちへの商品の——ベンヤミンがマルクスの冗談から借りた語でいうと「商品のたましい」の——感情移入能力が語られているあたりにも、ベンヤミンとブレヒトとの討論の反映をうかがいみることができらう、とぼくは思う。

むろん感情移入は、商品の側から人間になされるだけではない。商品において、とりわけパサージュの成立と万国博覧会の開催とが示すように、使用価値から交換価値が分離してきていること、そしてその過程のなかで、ひとびとが商品の「交換価値への感情移入」（およびその反動として他方に生ずる「骨董価値」への感情移入）を学ばされてきていることを、ベンヤミンは折りに触れて強調している。

いずれにせよ、二人の対話には相互挑発的などころがあったにちがひなく、このことは、ブレヒトの遺稿のなかのメモ「ボードレールの詩の美しさ」を読むことによっても、うらがきされる。このメモは明らかに、ベンヤミンの「ボードレールにおける第二帝政期のパリ」の草稿を読んで触発されたものであり、そこには同意と異論とが、日記でと同様、二つながら書き記されている。

ベンヤミンへの同意は、ボードレールを、フランスの大ブルジョワジーが労働者階級にたいして流血の弾圧を加えたときに、その手先となったものの報いられそうにはないことがすでに確定的となった時期の小ブルジョワジーの、詩人であると規定するメモの冒頭の部分や、ベンヤミンによるマルクスからの引用をそのまま引用している部分などに、よく見てとれる。

異論の例としては、「ブランキの行爲は、ボードレールの夢のいもうとだった。両者は絡まりあっていた」と書くベンヤミンにたいして、「ボードレールはブランキを背後から刺している。ブランキの敗北が、かれの見せか

けの勝利になる」とブレヒトが断ずるところや、「古典的古代になるはずとされた近代は、事実上ただの骨董に小古代になった」とブレヒトが記すあたりが、挙げられるだろうか。

興味深いのは、ボードレールの「小さい老婆たち」連作の第三番を、ブレヒトが「ボードレールの最良の詩のひとつ」として試訳していることだ。かれの訳詩は、ベンヤミンの若年時の訳詩に比べると、コミカルな面を強く押し込んでいる。ブレヒトにいわせると、「この詩はこんにちすでに、悪い意味ではなく、コミカルな名作となっている」。そして付け加えてかれは書く、「しかしそのことを見てとり、この詩を読んで笑うためには、ひとはいかに多くの歴史を知らねばならないことか。この詩は、にせボナパルトのデマゴギーを明示してみせるというよりは、もっぱらそのデマゴギーを生命源としている」。

そしてこんにちボードレールの詩を読む上で、もっともよく「多くの歴史」を知らせてくれる評論こそ、ベンヤミンの「ボードレールにおける第二帝政期のパリ」である、とばくらはいうことができよう。

以上で、冒頭に引用したティーデマンの數行が、誤解ないし曲解の上に立つ言辭であったことは、明らかだろう。かれが証拠として持ちだしたブレヒトの日記の記述は、「複製技術論」ではなくて、ボードレール論に関連していたのだ。

ではブレヒトは、「複製技術の時代における芸術作品」論を、どう評価していたのか？ その点の直接の証言は、ばくらには残念ながら知られていない。ブレヒトは一九三六年の夏にもベンヤミンをスヴェンボルに迎えているから、たぶんそのとき対話があったとは推測されるが、あいにく三六年には、ブレヒトもベンヤミンも日記を残

していないのだ。とはいえ、間接的な証跡なら、ないことはない。

ブレヒトが、自分も編集委員のひとりとして名を連ねていた『ダス・ヴォルト』誌に、ベンヤミンの「複製技術の時代における芸術作品」をドイツ語原文で掲載させる努力をしたことは、三六年一二月上旬のかれのベンヤミンあての手紙から、うかがわれる。かれの努力はけっきょくみらなかったけれども、このことをかれのせいとするのは酷だろう。『ダス・ヴォルト』の実質上の編集権は、モスクワ在住の者たちの手にあったのだから。

同じベンヤミン論文の公表を、別のかたちで実現させようとする試みは、ブレヒトによって翌年にもなされている。

一九三七年春、ブレヒトは「デイドロの会」なるものを作ろうと、積極的に画策した。この会は、芸術の生産者だけをメンバーとするもの（つまり『ダス・ヴォルト』で大口を叩いていたルカーチやクレラのような者たちを除外するもの）で、その目的は「反形而上学的・社会的な新しい芸術のイメージ」を形成することである。別のメモでもっと具体的に、この会は演劇芸術（映画芸術をそれにふくめて）を問題とする、として、つぎのような構想が述べられている。「演劇と映画によって実験をすすめる芸術家たちの、さまざまな仕事についての報告を集め、それらの交流を組織化する。会に提出される個々の論文は〔……〕機関誌上に発表される。」

かれが会員になるよう呼びかけようとした相手たちは、ソ連のエイゼンステイン、オフロップコフ、トレチャコフ、イギリスのオーデン、イシャウッド、ドゥーン、チェコのブリアン、USAのゴレリク、マクレイシュ、フランスのムシニャック、ジャン・ルノワール、スカンディナヴィアのペール・クヌソン、ノルダール・グリグ、ペール・リンドベリ、ドイツのアイスラー、ピスカートア、等々だった。

先廻りしていえば、亡命に亡命を重ねてゆかざるをえない状況のなかで、この組織活動は頓挫してしまうことになるが、会の成立に向けての熱心な協力者だったゴレリクあての手紙（三七年三月上旬）のなかで、ブレヒトは会の刊行するべきものとして、ベルンハルト・ライヒの労作とならんでベンヤミンの「複製技術の時代における芸術作品」論（ブレヒトはこの題名を書きまちがえているけれども）を、第一に推挙して、こう書いている。

「ベンヤミンの労作へ芸術にたいする複製技術の影響Vをきみに送ろう。この論文でベンヤミンは、芸術作品を技術的に大量に複製しうるということ（写真、映画）が、芸術と芸術観にいかん革命的に作用するかを、確認している。」

この数行を読むだけでも、冒頭に引用したティーデマンの説が中傷に類する謬説であることは、誰の目にも明らかだろう、とぼくは思う。